

3. 冷えにより症状が悪化した過活動膀胱患者への漢方薬の効果に関する検討

横浜元町女性医療クリニック・LUNA

○関口 由紀、金城 真実、喜多 かおる、前田 佳子
畔越 陽子、増子 香織、藤島 淑子

【はじめに】過活動膀胱は、尿意切迫感を必須症状とし、頻尿・夜間頻尿・切迫性尿失禁などを随伴する症状症候群である。抗ムスカリン剤の投与で、約7割の過活動膀胱患者の症状は改善し、そのQOLは上昇する。今回季節性の温度の低下による“冷え”による過活動膀胱患者の症状悪化の現状に関して検討した。

【方法】昨年(2008年)10月1日から2008年11月30日の2ヶ月間に横浜元町女性医療クリニックLUNAを受診し、過活動膀胱治療薬であるベシケア・デトルシトール・バップフォー・ステープラ・ウリトスの抗ムスカリン剤を処方されていた患者のうち、“冷え”を訴え、新たに漢方薬の投与された患者を抽出し、その治療経過を検討した。

【結果】2ヶ月間に5処方(処方)の投与を受けていた過活動膀胱の患者数は258名であった。

このうち漢方薬の投与を受けていた患者は、79名(30.6%)であった。このうち冷えを訴え、2008年に漢方薬の投与が開始された患者は、39名(15.1%)であった。

39名に主に冷え改善のために処方されていた方剤は、牛車腎気丸(12例)、当帰芍薬散(5例)、柴胡桂枝乾姜湯(4例)、当帰四逆加呉茱萸生姜湯(4例)、桂枝加朮附子湯(3例)、安中散(2例)、五淋散(2例)、清心蓮子飲(2例)、加味逍遙散(2例)、補中益気湯(1例)、温清飲(1例)、葛根加朮附湯(1例)であった。

冷えと、過活動膀胱に効果があり漢方薬を長期服用となった患者は21例(53.8%)。冷えと過活動膀胱に漢方薬が効果的であったが、春になり服用を中止した患者は10例(25%)。効果が認められず漢方服用を中止した患者は6例(15%)であった。

冷えと、過活動膀胱に効果があり長期服用となった患者の平均年齢は63歳。冷えと過活動膀胱に効果があったが、春になり服用を中止した患者の平均年齢は44歳であった。

【考察】過活動膀胱患者のうち季節性の温度の低下により症状が悪化する患者は15%で、このうち85%は、漢方薬で症状改善が可能であることが示唆された。

4. LUTSに対する漢方療法

獨協医科大学越谷病院 泌尿器科¹⁾

順天堂大学医学部 泌尿器科²⁾

社会保険蒲田総合病院 泌尿器科³⁾

○岡田 弘¹⁾、青木 裕章¹⁾、小川 一栄¹⁾、佐藤 両¹⁾
小堀 善友¹⁾、芦沢 好夫¹⁾、湯本 久雄¹⁾、八木 宏¹⁾
宋 成浩¹⁾、新井 学¹⁾、寺井 一隆²⁾、丸山 修³⁾

【背景】尿意切迫感と頻尿を主症状とする過活動膀胱(OAB)症状を主訴に外来受診する患者数が増加している。これらの患者に対しては、男性のBPHに合併したOAB患者には α 1遮断薬と抗コリン剤の併用が、女性患者に対しては抗コリン剤が第一選択薬として用いられている。しかしながら、抗コリン剤特有の副作用である口渇や便秘のために服用コンプライアンスの悪い患者や、効果に乏しい患者も相当数存在する。

また、外気温が低下してくるとOAB症状の増悪する患者が増加する傾向にある。

これらの患者に対する、抗コリン剤以外の治療手段としての漢方療法の経験を報告する。

【対象と方法】排尿機能外来を受診したOAB患者で、抗コリン剤を中心とした治療継続が不可能ないしは無効な患者のうち、最高気温が20℃を下回ってから(11月以降)、OAB症状の増悪した男性4例・女性6例を対象にした。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯7.5g分3で14-28日間処方し、OABSS・QOLスコア・赤外線サーモグラムを治療前後で検討した。

【結果】男性4例中3例、女性6例中4例でOABSS, QOLスコアともに改善した。悪化例は認められなかった。赤外線サーモグラムは、測定できた症例ではいずれも治療後に末梢皮膚温上昇を認めた。

当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、季節限定で使用すれば有用な薬剤と考えられた。